

S.C.WORKS 今週のスタディ！

【ヘッドライン】

- 1) 「シェファード」
- 2) 「子供のメタボ」
- 3-1) 「『捨てられない指輪』を資金化、チャリティー団体へ寄付」
- 3-2) 「コース整備で1プレー無料 団塊ゴルファー」
- 4) 「東京を油田に」

1) 「シェファード」

飲食店で温かい料理を温かいまま食べてもらうための食器型保温システムのこと。

皿の下に敷くもので、直径 30 センチメートル、中央が約 3 センチメートルの深さにくぼんでいる。このくぼみに専用の発熱剤をセットし、水を注いだ後に料理を載せた皿をセットすると、約 20 分間皿の表面温度を 70℃に保つことが出来る。発熱剤は水に触れると蒸気を発生して、この蒸気が皿の底面を温めて保温するという仕組みである。

従来、飲食店では料理が冷めないように、盛り付け前の皿をウォーマーや熱湯で素手で持たないほど熱しておくこと、盛り付けの際、調理場の冷房を止め少しでも料理が冷めるのを防ごうと気を遣うなど「温かい料理は温かいまま提供したい」という思いがあった。

ヒートランプで料理の上から温める方法では付け合わせの野菜が乾燥してしまうなどの欠点があったが、シェファードでは味を損なうことなく料理の温かさを保つことができる。

見た目にも良く、高質スーパーや百貨店の惣菜売場でも料理によっては活用機会がありそうだ。湯気がたちこめ、演出感ある売場となりそうだ。

2) 「子供のメタボ」

近年、肥満の子供が増えているという。

メタボリックシンドロームといえは大人の話と思われるかもしれないが、子供にも診断基準がつくられた。厚生省が適切な食事や運動の習慣を身に付けてもらうことを目的に作成した。

腹囲の基準が小学生で 75cm 以上、中学生では 80cm 以上。または、 $\text{腹囲 (cm)} \div \text{慎重 (cm)} = 0.5$ 以上が小児期メタボリックシンドロームということである。血糖値は年齢による違いは少ないとし、大人の特設健診の基準と同じ「100 以上」と定められている。

肥満児の割合は、30 年前と比べ、小学生で 2.6%から 4.8%、中学生では 4.9%から 9.5%に増えている。子供のころに肥満だと、多くが大人になっても肥満になっているという報告もある。

また、子供のうちに生活習慣を改善しておかないと、成人後に動脈硬化や糖尿病が早く進行する危険が高まると指摘されている。しかし、これらの基準値を超えたら病気、というわけ

ではないので通常は投薬等の治療は行わない。子供のうちは成長期というのもあり、食事制限をしすぎると発育上の問題があることもある。間食などを控え運動量を増やせば、数値などは正常値に戻ることが多い。

食生活の欧米化が進み、両親が共働きだったり、習い事が放課後に立て込んだりして、子供の食の環境が大きく変化してきている。正しい時間帯に栄養の偏らない朝昼夕の食事を探ることがなかなか困難になってきているのではないか。この基準制定をきっかけに、家庭でも食を通じた家族の健康を考える機会が増えれば良い。

3-1) 「『捨てられない指輪』を資金化、チャリティー団体へ寄付」

寄付市場の活性化を目的とするサービスの立案・運営をするチャリティーエージェントは先月から、恋人との別れや離婚などによって行き場を失った指輪を集め、金属として資金化することで得た収益を社会貢献活動団体へ寄付するサービス「good by rings (グッドバイリングス)」を始めた。

別れを機に指輪の処理に悩む人と社会貢献団体を結ぶ新しい業態の社会貢献活動支援サービスで、利用者は「good by rings」事務局宛てに不要になった指輪を送付し、自分が希望する支援団体を選択する。集められた指輪は同事務局により貴金属として資金化され、必要経費を除いた収益全額が各社会貢献団体に寄付される仕組みになっている。

「good by rings」の支援先は、WWF、UNICEF、国境なき医師団など。同事務局からは、寄付が行われたことの確認と指輪提供に対する御礼を兼ねたカードが送られる。

今年4月より制定された年金分割制度が離婚率増加をさらに助長すると考えられており、今後も利用者が増えるのではと見込まれている。

3-2) 「コース整備で1プレー無料 団塊ゴルファー」

団塊世代の人がゴルフ場でコース整備のボランティア活動をする代わりに、無料でプレーできる事業が宮城県で始まった。仙台市のNPO法人ゴールデンアカデミー仙台支部の取り組みで、ゴルフ場は「人手不足が解消できる」と歓迎。シニアゴルファーも「ゴルフ場での作業とプレーで、健康増進」と喜んでいる。

事業には50から70代の男女16人(5月末現在)が登録する。週1、2回、ゴルフ場に派遣されて4、5時間、コースの草取り、芝のはがれた部分への土入れ、集球などの軽作業に当たる。

作業を終えると、ゴルフ場から証明のスタンプをもらい、後日提示すれば、平日に限って1ラウンド無料でプレーできる。

ゴルフ場の人手不足が背景にあり、定年を迎えて自由時間のある団塊世代のボランティアで、人員の穴埋めをしようと、2007年11月に始められた。

寄付やボランティアは本来“善意の気持ち”が先に来るものだと思うけれど、『どうせ○○なら』という考えがキッカケでもいいかなと思ったニュース。『どうせ捨てるなら』、『どうせ暇してるなら』が何かを助けたり役に立てたりするのならば、一石二鳥で合理的。現代人らしいというか、これからもこういった一石二鳥がたくさん増えるのではないかなと思う。

4) 「東京を油田に」

「TOKYO 油田 2017」というプロジェクトがある。天ぷら油でディーゼル車が動くなら、570万世帯から廃油がでる東京は有数の“油田”になる、と、廃食油回収業ユーズの代表がこのプロジェクトを牽引する。

同社は93年に100リットルの廃油から95リットルの燃料「VDF」を精製する技術を開発した。このVDFは軽油同様にディーゼル車で使え、1リットル130円と安価なので問い合わせが相次いでいるが、応えきれていないという。問題は、どのように廃油を一般家庭から集めるかにある。年間20万トンといわれる廃油を出来るだけ集めるには、一般の人が廃油を持ち込める拠点を各地により多く設けることが必要である。

原油高と環境意識の高まりからこのプロジェクトに賛同する飲食店や環境団体の応募が急増し、拠点数はこの1年で倍の14に拡大。数ヶ月で50拠点を越す見込みである。これからは精製と給油の施設も増やすため、廃油循環システム構築を急ぐ。

東京でこのような動きが広まれば、これを例に地方でも、各スーパーや公共施設などに回収拠点が設けられ、より廃油の循環が活発になるだろう。廃油というゴミから日ごろ使う燃料ができるのは素晴らしいサイクルである。これからのプロジェクトの広がりに期待したい。